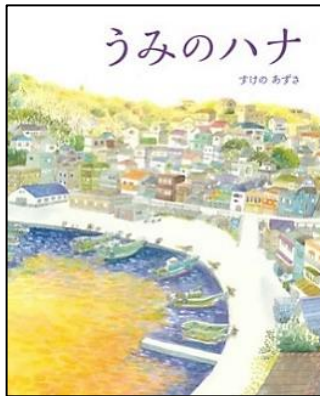


すけのあずさんの えほん



「うみのハナ」 BL 出版

和歌山市の漁師町雑賀崎の古い理髪店を舞台にした祖父母と孫娘の物語。同地に伝わる、春と秋の彼岸の中日に海に沈む夕日は花びらが降るように見える伝承「ハナフリ」が題材。

和歌山市の港町「雑賀崎」を舞台に、人々の暮らしに溶け込んだ風習を、透明感あふれる水彩画で描かれたこの絵本。風景の描画は息をのむほどの美しさです。

地元に愛されていたおじいちゃんのお店、それを引き継いでいくひとたちの想いが伝わってくる、心あたまるお話です。

優しいタッチのすけのさんの描く雑賀崎の風景に引き込まれます。



「やぎのタミエはおかあさん」
BL 出版

やぎのタミエと姉妹は大の仲良し。タミエは、妹よりも大きくて力も強い、いたずらっ子。よくにげだしては、畑に入ってしまう。でも、近頃タミエは元気がありません。のっそりあるいたりして病気なのかしら？姉妹は心配です。お父さんから、タミエのお腹の中に赤ちゃんがいることを教えてもらいました。そして出産に立ち合うことに…。

この本は、すけのさんが年賀状にヤギのイラストを描いたことをきっかけに、出版社からヤギを題材にした絵本を描いてみないかと提案があり生まれた絵本。すけのさんは、以前田舎でやぎを飼った経験から、感動的だった出産をテーマに描くことを決め、タミエが苦しむ様子も絵で伝えています。いのちの尊さ、そして、春の草木が芽吹く自然の美しく細やかな描写も、水彩画でていねいに柔らかく表現しています。



「みずうみ色のウィピル」
BL 出版

あるところに、青のウィピルばかり着ている村があります。湖のほとりの村でお母さんと暮すラサは、お母さんから機織りを教わりみごとなウィピルを織れるようになりました。娘に成長したラサは、市場に売りに行きましたが、しゃべるのが苦手でなかなか売れません。ある日のこと、ラサが湖で洗濯をしていると魚が話しかけてきました。おどろいたラサですが、しだいに魚と話すようになり、人と話すことが好きになりました。湖での様子をみていた母親は、魚を魔物と思いラサを湖に行かせないようにしました。ラサは、元気がなくなり…。著者が、世界一周旅行中に訪れた中米・グアテマラ。古代マヤから今も織り継がれる民族衣装”ウィピル”に魅了されました。とくに湖畔の村で着られていた青のウィピルの美しさは忘れられないと、その思いからこの物語が生まれました。

(出版社からの内容紹介)